

スリランカ研修を思い返してみると、自分が見た風景や出会った人々が、訪問した先々を舞台としたひとつの映画のように頭に浮かんでいきます。活気ある街の熱気や独特の香り、クラクションの音までも、はっきり覚えていて、目を閉じたら次の瞬間には姿あらかわしできそうなくらいです。でも、そこでの体験は全部自分の頭の中でしか起こっていない出来事のような気もしてきます。夢を見ていたような感じです。というのはつまり、異国情緒に溢れていて、日差しのせいもあるのか全てがフォトジェニックでキラキラしていたということです。

最近、たくさんの綺麗な映像があふれていて、でもほとんどはフィルターで加工されていたり、本当のよりもリアルだけれどバーチャルなものとかが沢山あって、そんな中で実際の景色に感動したりとか、あまりできなくなっています。でも、スリランカでは映画のセットに入り込んだような気分で、それいて現実に、“目を奪われる”という体験をしました。地球にはこんな場所があったんだ。ワオ！知り尽くしている世界ではものすごく興味が湧くような全く未知のものに遭遇する機会はほぼないですが、ここでは好奇心発動センサーの過剰反応と冒険心の暴走で過労死しそうなほどでした。

前置きが長くなりましたが、今回の研修はとても充実していました。スリランカの名所といわれる、紅茶園や仏歯寺など定番の観光地巡り、加えて、現地の日本語学校や公立校、孤児院での、よりローカルな草の根的交流と、スリランカという国を2つの違う視点から、外と中からはさみうちにしました。メインの目的は文化交流なので、後者3箇所の訪問先をそれぞれ取り上げて感想を述べたいと思います。

まずはJSS日本語学校。ここは、ジュニア会議とかねてから親睦のある〇〇さんが運営する教室です。生徒は日本で働くために日本語を勉強しています。お互いの国を紹介し合ったり、日本について彼らから質問を受けました。ただ、生徒は大人の、20代半ばの男の人が多かったので、全体的に和気あいあいと積極的な交流という雰囲気ではありませんでした。あと、言葉が通じなかったこともあります。スリランカではかなり英語で会話ができるとありましたが、やはりガイドブックで読んだことなので、それはきっと観光地で困らない程度のことらしいです。世界共通語になりつつある英語ですが、その“世界”は多分たくさんの地域を排除して言っていることなんだと気付きました。だから英語さえ話せば大丈夫な訳でもなく、特に今回の研修においては英語の有用性がかなり低かったです。さらに日本とスリランカとの文化交流という目的で英語を媒介にするのは当たり前のようによくわかりません。ただ、意思疎通の手段が十分でないなか会話をするのも面白かったので良い体験になったと思います。

女子校での交流は今回の研修のハイライトでした。とてもこざっぱりとして設備の整った学校で、制服の白いジャンプスカートに黒リボンで結んだおさががいかにもという感じでした。スリランカではどこの学校も同じ型を採用しているようです。然り男子も白い長袴に白い半袖姿です。お寺に行く時などの正装は全て白で、それは仏陀が白を好むからです。スリランカは仏教国です。女子校では終始たくさんの生徒や先生が私たちを

エスコートしてくれ、学校生活について紹介してくれたり、私たちの訪問を有意義なものにしようとしてくださいました。“交流会”とは実際には盛大な歓迎会で、前々から念入りに準備してくれていた感じでした。私たちが踊り子たちに先導されて会場に入場すると、そこには1万人くらいの生徒がいました。来賓席のようなところに座らされると、スリランカ語と日本語の司会で会がスタート。そこからは踊り子が次々と出てきて、10曲くらい踊りました。ハリウッドでは必ずエンディングで登場人物が総出で踊り出しますが、まさにそんな感じで、シーンに入り込んだみたいな迫力です。キャンディアンダンスを始めとして、太鼓を用いたものや芝居形式のものもあり、全て生演奏だったのにも驚きました。完成度が高いのもそうですが、パフォーマンスの見栄えだけではなくその中に活力がみなぎっていて、圧倒的でした。ダンサーの顔つきもガラッと変わって、生徒の雰囲気もなんか変わるんです。私たちのメンバーも日本舞踊や琴を披露しましたが、今そうゆう日本伝統芸みたいなのを身につけている人は少数ですし、私なんか1人の傍観者として普通に楽しんでしまいました。ここでは伝統が現代にまだまだ生きていて、ちょっとしたイベントの時にサリーを着こなせたり、民族舞踊を学ぶのは当たり前の教養という感じが残っていました。キャンディアンダンスはもともと男性しか踊ることが許されていなかったことを考えると、それは興味深いというか色々知りたいことが出てきますがネットではなかなかいい情報がなかったので本でもあったら読んでみたいです。そして鑑賞している間にもお水やおつまみを回してくれたりと余念がありません。そんな楽しいひと時も終わり、出番があった人がやっと落ち着いたところで、ディスカッションが始まるはずでしたが、都合でなくなってしまいました。歓迎会では、お互いの文化交流を国を代表しているような形で行い、とても盛り上がり、そもそもの目的は果たせたのかなと思います。ただ、お魚さんの芝居で男役をしていた女の子や、声域が信じられないほど広くて声が素敵な弾き語りの女の子について、ひとりの同じ年頃の子として知り合いになりたかったかな、と思います。実際にはお話ししたりできませんでしたが、会が終わった後に連絡先を交換しに来てくれた子もいて、今でもたまにチャットをしています。すると、意外に英米で人気の洋楽や海外ドラマの趣味があったりして、ホテルでやっていたアメリカのテレビ番組は女の子の人がみんな肩パッドしているくらい大昔のものだっただけに驚きました。

この日は他の日と比べてスケジュールが圧巻で、象の孤児院を訪問した後、孤寺院訪問もありました。孤児院というと私には全くイメージがつかないところで、バスで向かっている間にもとても不安でした。どんな子供達なのかも知らないけれど、かわいそうだな、と感じてしまうことが怖かったです。訪問をして子供達にどう接すればいいかも分からないし、支援のために食料や雑貨屋おもちゃなどたくさん持って行きましたが、目的は支援なのか見学なのか交流なのかよく分からなくて。私は暗い雰囲気に割と過剰に動揺してしまう方で、バスの中でもうすでにそんな感じでしたが。でも結果的にそれは杞憂に終わりました。子供達は本当に普通の、というか見たところ無邪気であっけらかんとした子供達でした。たくさんのおもちゃを見たらもう目がランランとしてきて、次から次へと目移りしてなかなか一つに決められなかったり。結局その子が一大決心して

選んだのはプラスチックの日本刀で、満足していたようです。彼らが共同生活している寺は、なかなか居心地の良さそうな寮のようなところで、2人部屋には“kindness” “honesty”など、名前がついています。それでも十分な食事や日用品が得られない中生活しています。でも私は、不適切かもしれないですが正直、大勢で兄弟のように暮らしている彼らが、ひとりっこの私には少し羨ましく感じました。また、彼らの敬虔な信仰心にもです。私は妙に迷信や星回りを気にする割に、あまり仏や神といったものはあまり気にしていないというか、特定の考えを支持しているわけではないです。初詣に行っ手を手を合わせても結局自分は何がしたいのかよく分からなくなって終わってしまい、祖父の墓参りでも、お気に入りの孫だった割に、私は涙を流して合掌する母や祖母を前に、こんな石に向かって手は合わせないと言って怒られるくらいです。人間を超えた存在や死後の世界を否定するわけでもなく、むしろ逆なのですが、日本ではなんというか宗教がもう形式的なものになっていて、信仰心も気まぐれなだけに、よく分かりもしない儀式はしないという妙な反発心があるんだと思います。とにかく、本題に戻ると、僧になる子供に限らずスリランカの人々は敬虔な仏教徒で、その教えが生活の中、人々の生き方や価値観、人との関わりの中など全てに根ざしているようなのです。そこにできあがる平和はどんな宗教に属する人でも認める穏やかさです。特に今、価値観が多様化する中で生き方の自由度は増したけれど、自分で宗教なりモットーなり信仰を見つけなければいけないし、他のみんながバラバラに生きてるからその信仰で必ず幸せになれるわけでもなく、選択に伴う自己責任でもう嫌になってしまうような時代です。だから私は、絶対的な何かが欲しいと思います。構造主義とか何も考えずに、ひたすらに信じられるものがあるのはいいな、と思うんです。

また余談ですが、スリランカでは女性の露出にかなり厳しいところがあるようです。機内でティムバートの新しい映画で今たぶん日本でも流行ってるのを見たんですが、主人公の男の子が移動遊園地のシアターで怪物と戦うシーンがあるんです。そのシアターの外観にはハリウッドっぽいキラキラした絵が描いてあって、グラマラスなドレスを着た女の人とかがいるんです。それに全部モザイクがかかっているんです。もともと子供向け映画でまずいものは写ってないはずなんですが、それもダメなのか！というかむしろそういう感じに思えてきてしまうところでもあります。研修として海外に行った時に、どんな刺激を受けて、学びを得るのが模範的なのか分からないですが、良い経験でした。メンバー同士の仲も深まって。深まってはいないかもしれませんが打ち解けあってきた感じです。そして、報告会という大仕事がまだ残っていますので、その準備を通して今回の振り返りをして、そこが1番重要なのではと思います。それぞれ色々考えたことはあると思いますが、言葉にしてシェアしない限りただの一時の感情に留まってしまうから、そこまでして研修が終了するというところで、しっかりやっていきたいです。

最後の最後ですが、ひとことでまとめると、「国際交流」について色々と考えさせられる研修でした。国際交流というと、全く違う文化をもった人たちが相手の文化を面白い

興味深いといって、交流しているイメージですが、最近ではそれが一部の人たちが趣味みたいにしてやっていることから、「多文化共生社会」の実現のために国全体で文化の違いを乗り越え価値観の違う他者を理解し...という「国際人」の育成に取りかかるまでになりました。グローバル化のそんなこんなについての評論を学校でたくさん読みますが、外国に来て外国人と触れ合う中で、実際にはひとりの人間と人間の関係だと思いました。同じ日本人と接するときと、外国人と接するときとで、うまくやっていくために文化的な配慮が必要な場合もありますが、特別に態度を変える必要もないし、結局はどんな人間関係でも、相手へのリスペクトを忘れずに正直でフランクな関係を気づくのが大切なことなんじゃないかと色々な場面で気づきました。

M・H